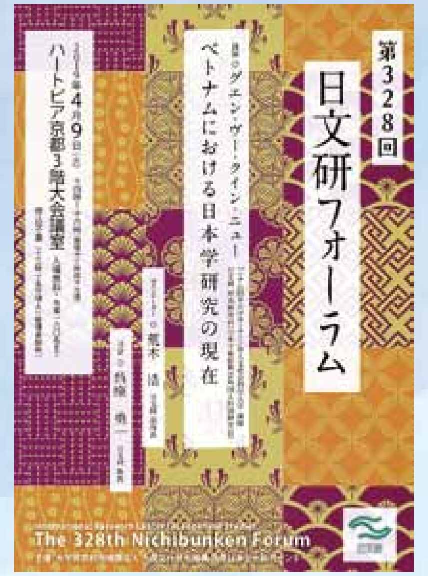
日文研フォーラムについて

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センター（日文研）創設以来の事業のひとつです。海外に研究拠点を持ち日文研に滞在中の日本研究者の研究成果を市民の皆さまに分かりやすくご紹介することを主な目的としています。月１回、年間８～10回程度、京都市中心部の会場で開催しています。世界のさまざまな国の日本研究者に自分の研究について語ってもらい、討論を通じた発表者と参加者との知的交流を支えております。



昼間開催　14：00～16：00
夜間開催　18：30～20：30

フォーラムの流れ

- 開始
- 司会者からの内容の説明　発表者の紹介
- 発表者講演
- 休憩　この間に聴衆からの講演についての「質問用紙」を回収し、とりまとめ
- コメンテーターのコメント
- 質疑応答
- 司会者まとめ
- 終了

上：第328回フォーラム　2019年４月９日　ハートピア京都
左：第４回フォーラム　1988年４月19日　国際交流基金京都支部（安田火災海上保険ビル）

第３～第305回　日文研オープンアクセスで公開しています。

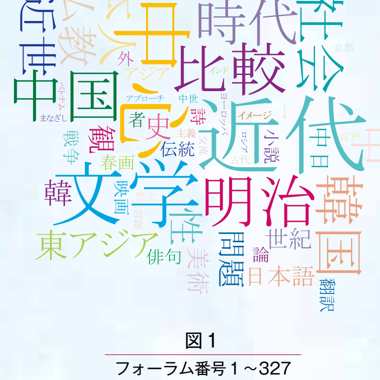


図１
フォーラム番号１～327

図２（法人化前）
フォーラム番号１～167

図３（法人化後）
フォーラム番号168～327

32年間におけるフォーラム327回のうち発表テーマ332を分析し、頻度順で可視化してみました（図１）。「頻度＝大きさ」です。頻度の最も高い「日本」と「文化」を外したのち、法人化前後に分けてみると（図２･３）、「文学」が小さくなり、「中国」や「韓国」といった東アジアの国名が大きくなっているのが分かります。

Voyant Tools　https://voyant-tools.org/

法人化前 1987（昭和62）～ 2003（平成15）年度

No.	年度	発表テーマ	発表者	所属機関の国・地域	コメンテーター	報告書	夜間
001	1987	近代日本の社会移動に関する一、二の考察	バロータ・アレッサンドロ	イタリア			
002	1987	南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展	エンゲルベルト・ヨリッセン	日本			
003	1987	大相撲の近代化	リー・A・トンプソン	日本		○	
004	1988	庭園に見る東西文明のちがい	フォスコ・マライーニ	日本			
005	1988	日本陽明学の一断面―大塩平八郎研究の問題点―	宋 彙七	韓国		○	
006	1988	近世後期日本の遊び―拳を中心に―	セップ・リンハルト	オーストリア			
007	1988	近代日本小説における女性像―現実と幻想―	スーザン・J・ネイピア	米国	上野 千鶴子	○	
008	1988	恵信尼の書簡―仏教に生きた中世の女性―	ジェームズ・C・ドビンズ	米国	久野 昭	○	
009	1988	中国人留学生の見た明治日本	厳 安生	中国	上垣外 憲一	○	
010	1989	教育投資と日本の戦後経済高度成長	劉 敬文	中国	菊池 城司	○	
011	1989	中世京都における土倉酒屋―都市社会の自由とその限界―	スザンヌ・ゲイ	米国	村井 康彦	○	
012	1989	インタビュー・ノンフィクションの可能性―猪瀬直樹著「日本凡人伝」を手掛りに―	夏 剛	日本		○	
013	1989	国家神道を考える	エルンスト・ロコバント	日本	鈴木 貞美	○	
014	1989	近代日本文学研究の問題点	キム・レチュン	ソ連	鈴木 貞美	○	
015	1989	江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題	ハルトムート・O・ローターモンド	フランス		○	
016	1989	弥生時期日本に来た中国人	汪 向榮	中国		○	
017	1989	地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較	ジェフリー・ブロードベント	米国		○	
018	1989	日本の国際化の展望と外国人労働者問題	エリック・セズレ	フランス		○	
019	1989	レトリックとしての江戸	スミエ・ジョーンズ	米国		○	
020	1989	往生―日本の来生観と尊厳死の倫理―	カール・ベッカー	日本		○	
021	1990	忘れられた兵士―戦争中の日本に於けるインド留学生―	グラント・K・グッドマン	米国		○	
022	1990	柿本人磨呂と日本文学における「独創性」について	イアン・ヒデオ・リービ	米国			
023	1990	村上春樹―神話の解体―	リヴィア・ロディカ・モネ	米国			
024	1990	魯迅の悲劇と漱石の悲劇―文化伝統からの一考察―	李 国棟	中国		○	
025	1990	正月の風俗―中国と日本―	馬 興国	中国		○	
026	1990	現代日本における仏教と社会活動	ケネス・クラフト	米国	久野 昭	○	
027	1990	義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較	アハマド・M・ファトヒ	エジプト			
028	1990	言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程	カレル・フィアラ	チェコ		○	
029	1990	ソビエットの日本文学翻訳事情―古典から近代まで―	アレクサンドル・A・ドーリン	ソ連		○	
030	1990	バロック・ヨーロッパの日本庭園情報―ゲオルグ・マイステルの旅―	ウィーベ・カウテルト	オランダ			
031	1991	ポーランドにおける谷崎潤一郎文学	ミコワイ・メラノヴィッチ	ポーランド		○	
032	1991	三百年前の京都―ケンペルの上洛記録―	ベアトリス・マリアンヌ・ボダルト・ベイリー	オーストラリア			
033	1991	インドにおける俳句	サトヤ・ブシャン・ワルマ	インド		○	
034	1991	ドイツ統合とベルリンにおける森鴎外記念館	ユルゲン・ベルント	ドイツ	鈴木 貞美		
035	1991	忘れられたアジアの片隅―50年間の日本とビルマの関係―	ドナルド・M・シーキンス	日本	飯田 経夫	○	
036	1991	中国詩歌における日本人のイメージ	王 暁平	中国	中西 進	○	
037	1991	日本語の起源―日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る―	辛 容泰	韓国	村井 康彦	○	
038	1991	古代日本佛教における韓国佛教の役割	洪 潤植	韓国	上垣外 憲一	○	
039	1991	インドは日本から遠い国か?―第二次大戦後の国際情勢と日本のインド観の変遷―	サウィトリ・ウィシュワナタン	インド	木村 汎	○	
040	1991	正岡子規と明治の随筆	ジャン・ジャック・オリガス	フランス	芳賀 徹		
041	1992	チェコスロバキアにおける日本美術	リブシェ・ボハーチコヴァー	日本	別役 恭子	○	
042	1992	谷崎文学の「読み」と翻訳―アメリカにおける最近の傾向―	ポール・マッカーシー	日本	中西 進		
043	1992	兵法から武芸へ―徳川時代における武芸の発達―	G・カメロン・ハーストⅢ	日本	村井 康彦		
044	1992	オーストラリアから見た日本社会	杉本 良夫	オーストラリア	園田 英弘		
045	1992	中国における聖徳太子	王 勇	中国	村井 康彦	○	
046	1992	直観と芭蕉の俳句―俳論を中心に―	李 栄九	韓国	中西 進	○	
047	1992	日本疾病史考―「黴毒」の医学的・文化的概念の形成―	ウィリアム・D・ジョンストン	米国	井上 章一	○	
048	1992	アジアにおける日系企業の戦略転換―技術移転をめぐって―	マノジュ・L・シュレスタ	日本	飯田 経夫	○	
049	1992	キリスト教受容における日韓比較	朴 正義	韓国	山折 哲雄	○	
050	1992	伝説と歴史の間―北條政子と宗教―	マーティン・コルカット	米国	村井 康彦		
051	1992	チャールズ・L・フリアー（1854―1919）とフリアー美術館―米国の日本美術コレクションの一例として―	清水 義明	米国	別役 恭子	○	
052	1993	日本近代知識人の思想と実践―有島武郎の場合―	金 春美	韓国	山折 哲雄	○	
053	1993	皇太子妃選択の象徴性―旧身分文化との関連を中心として―	タキエ・スギヤマ・リブラ	米国	園田 英弘		
054	1993	変革と選択：10世紀の日本と朝鮮―科挙制度をめぐって―	姜 希雄	米国	村井 康彦		
055	1993	涙の語り―平安朝文学の特質―	ツベタナ・クリステワ	ブルガリア	中西 進	○	
056	1993	和算と韓算を通してみた日韓文化比較	金 容雲	韓国	伊東 俊太郎	○	
057	1993	徳川時代思想における荻生徂徠	オロフ・G・リディン	デンマーク	笠谷 和比古	○	
058	1993	無常観の東西比較	マヤ・ミルシンスキー	スロベニア	山折 哲雄	○	
059	1993	日本・ベルギー文化交流史―南蛮美術から洋学まで―	ウィリー・フレッディー・ヴァンドゥワラ	ベルギー	笠谷 和比古		
060	1993	自然と偽作―井上靖文学における「陰謀」―	J・マーティン・ホルン	日本	芳賀 徹		
061	1993	外から見た日本文化と日本文学―俳句の可能性を中心に―	マイヤ・ゲラシモワ	ロシア	中西 進		
062	1993	和辻哲郎の風土論の現代性	オギュスタン・ベルク	フランス	白幡 洋三郎		
063	1994	出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学　1880―1930	リチャード・トランス	米国	上垣外 憲一	○	
064	1994	フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題	シルバーノ・D・マヒウォ	フィリピン	園田 英弘		
065	1994	「魔都」体験―文学における日本人と上海―	劉 建輝	中国	鈴木 貞美		
066	1994	私の日本語発見―王朝文を中心に―	チャールズ・J・クイン	米国	中西 進		
067	1994	幻の行列―秀吉の葬送儀礼―	フランソワ・マセ	フランス	山折 哲雄		
068	1994	中日比較食文化論―健康的飲食法の研究―	賈 蕙萱	中国	村井 康彦	○	
069	1994	日本語の表現からみた異文化摩擦のメカニズム	彭 飛	日本	山折 哲雄		
070	1994	根付―ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に―	ミハイル・ウスペンスキー	ロシア	別役 恭子	○	
071	1994	記紀神話における二神創世の形態―東アジア文化とのかかわり―	厳 紹盪	中国	中西 進	○	
072	1994	渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神	王 家驊	中国	伊東 俊太郎	○	
073	1995	日本伝統音楽における語り物の系譜―旋律型を中心に―	アリソン・トキタ	オーストラリア	井上 章一	○	
074	1995	和歌の起源―神話と歴史―	リュドミーラ・エルマコーワ	ロシア	中西 進	○	
075	1995	近世日本の女性画家たち	パトリシア・フィスター	日本	別役 恭子		
076	1995	「恨」の日韓比較の一考察	崔 吉城	日本	山折 哲雄		
077	1995	日中の敬語表現	蘇 徳昌	日本	濱口 惠俊	○	
078	1995	雷神思想の源流と展開―日・中比較文化考―	李 均洋	中国	井波 律子	○	
079	1995	豊臣秀吉と高台寺の美術	ウィリアム・H・サモニデス	米国	辻 惟雄		
080	1995	俳句の国際性―西欧の俳句についての一考察―	タチヤーナ・L・ソコロワ＝デリューシナ	日本	杉本 秀太郎	○	
081	1995	日本の近代性とアジア―絵画の場合―	ジョン・クラーク	オーストラリア	井上 章一		
082	1995	京の雪、能の雪	ジェイ・ルービン	米国	光田 和伸	○	
083	1995	日本近代美術史の成立―近代批評における新語―	イザベル・シャリエ	日本	早川 聞多		
084	1996	日本近代文芸におけるゴシック風小説―泉鏡花と谷崎潤一郎の場合―	リース・モートン	オーストラリア	鈴木 貞美	○	
085	1996	能における「草木成仏」の意味	マーク・コウディ・ポールトン	カナダ	光田 和伸	○	
086	1996	社会的構築物としての相撲―報恩古式大相撲の事例を巡って―	フランシスコ・ハビエル・タブレロ	日本	尾本 惠市	○	
087	1996	筑前琵琶―文化を語る楽器―	シルヴァン・ギニャール	日本	早川 聞多		
088	1996	怨霊の領域	ハーバート・E・プルチョウ	米国	山折 哲雄		
089	1996	シャクシ・女・魂―日本におけるシャクシにまつわる民間信仰―	王 秀文	中国	千田 稔	○	
090	1996	明治前期に来日した中国人の外交官たちと日本	王 宝平	中国	井波 律子		
091	1996	中国語の中の日本語	陳 生保	中国	芳賀 徹	○	
092	1996	奈良時代の文化と情報	アレキサンダー・N・メシェリャコフ	ロシア	千田 稔	○	
093	1996	言語から見た日本	郭 永喆	韓国	芳賀 徹		
094	1996	弁当と日本文化	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル	スペイン	白幡 洋三郎	○	
095	1997	弱き思惟―解釈学の未来を見ながら―	ミケーレ・マルラ	米国	鈴木 貞美	○	
096	1997	日本浄土思想と言葉―なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか―	デニス・ヒロタ	米国	光田 和伸	○	
097	1997	近世商人の世界―三井高房『町人考見録』を中心に―	ヤン・シコラ	チェコ	飯田 経夫	○	
098	1997	向う側の文学―近代からの再生―	鶴田 欣也	カナダ	稲賀 繁美		
099	1997	『菊と刀』のうら話	ポーリン・ケント	日本	柏岡 富英	○	
100	1997	「日本文学」とは何か―21世紀に向かって―	セオドア・ウィリアム・グーセン	カナダ	鈴木 貞美		
101	1997	日本および日本人―外からのまなざし―（パネルディスカッション）	金 禹昌 リヴィア・ロディカ・モネ カール・モスク ヤン・シコラ 鶴田 欣也	韓国 カナダ カナダ チェコ カナダ	 稲賀 繁美 井上 章一 千田 稔 	○	
102	1997	猿から尼まで―狂言役者の修業―	ジョナ・サルズ	日本	井上 章一	○	
103	1997	京都考見録―韓国文化人類学者の経験―	姜 信杓	韓国	千田 稔		
104	1997	中世禅林の異端者―一休宗純とその文学―	高 文漢	中国	井波 律子	○	
105	1997	和魂漢才、和魂洋才―語彙・表記に見る日本文化の特性―	シュテファン・カイザー	日本	山田 奨治		
106	1998	幽霊と妖怪の江戸文学	スミエ・ジョーンズ	米国	小松 和彦		
107	1998	映画と文学の間に―金井美恵子の小説における映画的身体―	リヴィア・ロディカ・モネ	カナダ	稲賀 繁美		
108	1998	化粧の文化地理	島崎 博	カナダ	千田 稔	○	
109	1998	なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか―詩的イメージとしての典故―	丘 培培	米国	光田 和伸	○	
110	1998	日本の教育がかかえる問題点	ブルーノ・リーネル	スイス	井上 章一		
111	1998	『愛玩』―安岡章太郎の「戦後」のはじまり―	アハマド・M・ファトヒ	エジプト	鈴木 貞美	○	
112	1998	「道行き」と日本文化―芸能を中心に―	アリソン・トキタ	オーストラリア	光田 和伸	○	
113	1998	地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割	グレン・フック	英国	園田 英弘		
114	1998	「中」のシンボリズムについて―宇宙論からのアプローチ―	杜 勤	中国	千田 稔	○	
115	1998	日本の民主主義―沖縄からの挑戦―	シーラ・スミス	米国	園田 英弘		
116	1998	うたの色々―翻訳は詩歌の詩化または死化?―	エドウィン・A・クランストン	米国	早川 聞多	○	
117	1999	石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について	ウィリアム・J・タイラー	米国	鈴木 貞美	○	
118	1999	内藤湖南先生の真蹟―高麗太祖顯陵詩について―	金 知見	韓国	頼富 本宏	○	
119	1999	言葉いろいろ―日本の言葉に反映された文化の特徴―	マリア・ヴォイヴォディッチ	モンテネグロ	石井 紫郎		
120	1999	心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力	リース・幸子・滝	米国	小松 和彦	○	
121	1999	明治初期における朝鮮通信使の日本見聞	宋 敏	韓国	千田 稔	○	
122	1999	二十一世紀の漢文―死語の将来―	ジャン＝ノエル・アレキサンドル・ロベール	フランス	頼富 本宏	○	
123	1999	鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち	ヴラディスラフ・ニコロヴィッチ・ゴレグリャード	ロシア	白幡 洋三郎	○	
124	1999	鬼のいる光景―絵巻『長谷雄草紙』を読む―	楊 暁捷	カナダ	小松 和彦	○	
125	1999	年末・年始の聖なる夜―西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究―	エミリア・ガデレワ	日本	千田 稔	○	
126	1999	東アジア獅子舞の系譜―五色獅子を中心に―	李 応寿	韓国	稲賀繁美、高橋裕一	○	
127	1999	皇室と日本赤十字社の始まり	アンナ・マリア・トレーンハルト	ドイツ	笠谷 和比古		
128	2000	アジアの西の境	ペッカ・コルホネン	フィンランド	千田 稔	○	
129	2000	五・七・五、日本と韓国	金 貞禮	韓国	光田 和伸	○	
130	2000	出島―長崎―日本―世界　憧憬の旅―サダキチ・ハルトマン（1867―1944）と倉場富三郎（1871―1945）―	ケネス・リチャード	日本	稲賀 繁美	○	
131	2000	お盆と正教の五旬祭―比較的なアプローチ―	リュドミラ・ホロドヴィッチ	ブルガリア	千田 稔		
132	2000	「物のあはれ」とは何なのか	マーク・メリ	日本	光田 和伸	○	
133	2000	読み書きできなかったのは誰か―明治の日本―	リチャード・ルビンジャー	米国	園田 英弘		
134	2000	日本語の「カゲ（光・蔭）」外―日本文化のルーツを探る―	辛 容泰	韓国	千田 稔	○	
135	2000	中国文人が観た明治日本―旅行記を読む―	蔡 敦達	中国	園田 英弘		
136	2000	長者の山―近世的経営の日欧比較―	バルト・ガーンズ	日本	笠谷 和比古	○	
137	2000	仏教の戒律とは何か?	ポール・シェルダン・グローナー	米国	頼富 本宏		
138	2001	中日姓名の比較について―親族の血縁性と社会性―	李 卓	中国	笠谷 和比古	○	
139	2001	西洋における俳句の新しい受容へ	エッケハルト・マイ	ドイツ	光田 和伸	○	
140	2001	中国現代建築の成立基盤―留日建築家・趙冬日と人民大会堂―	徐 蘇斌	日本	井上 章一	○	
141	2001	忠臣蔵再考―四十七士の三百年―	ヘンリー・スミス	米国	笠谷 和比古		
142	2001	聖人伝、高僧伝と社会事業―古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に―	ジョナサン・オーガスティン	米国	頼富 本宏	○	
143	2001	日韓上代言語域―神と国と人と―	アレキサンダー・ヴォヴィン	米国	鈴木貞美、長田俊樹		
144	2001	日本社会における「近親婚」と中国の「同姓不婚」との比較	官 文娜	中国	笠谷 和比古		
145	2001	大庭みな子『三匹の蟹』―ミニスカート文化の中の女と男―	チグサ・キムラ・スティーブン	ニュージーランド	鈴木 貞美	○	
146	2001	親日仏教と韓国社会	申 昌浩	日本	園田 英弘	○	
147	2001	近代詩における擬声語について	マシミリアーノ・トマシ	米国	光田 和伸	○	
148	2001	日韓言語文化の比較―語る文化と語らぬ文化―	鄭 惠卿	韓国	鈴木 貞美		
149	2002	初期洛中洛外図の人脈と武家作法―三条本を中心に―	マシュー・フィリップ・マッケルウェイ	米国	早川 聞多		
150	2002	禅心理学的生命観―人間の生命現象を中心に―	李 光濬	韓国	鈴木 貞美	○	
151	2002	中日関係と相互理解	魯 義	中国	園田 英弘	○	
152	2002	建物と権力―明治初期の東京の建築について―	アレクシア・ボロ	イタリア	千田 稔		
153	2002	近世後期「美人風俗図」の絵画的特徴―日韓比較―	李 美林	日本	稲賀 繁美	○	
154	2002	伝授から伝統へ―中・近世日本における「啓蒙」の一面について―	マルクス・リュッターマン	ドイツ	笠谷 和比古		
155	2002	神代文字と日本キリスト教―国学運動と国字改良―	金 文吉	韓国	松田 利彦	○	
156	2002	問題化された身体―明治時代における医学と文化―	スーザン・バーンズ	米国	小松 和彦		
157	2002	天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末―近世日本における公的美徳と私的暴力をめぐって―	デビット・ハウウェル	米国	小松 和彦		
158	2002	隠逸山水に秘められた「近代」―富岡鉄斎を読む―	戦 暁梅	日本	稲賀 繁美		
159	2002	「母国語」とは誰の言葉?―言語と国民国家―	リチャード・オカダ	米国	鈴木 貞美		
160	2003	旧満州における戦前日本の町づくり活動	ウィリアム・スウェル	カナダ	劉 建輝	○	
161	2003	神々の使者に扮装する愉しみ―門付け儀礼の演劇性をめぐって―	朴 銓烈	韓国	小松 和彦		
162	2003	詩の翻訳は可能か―金素雲訳『朝鮮詩集』の場合―	林 容澤	韓国	稲賀 繁美		
163	2003	ブルガリア人の日本文化観―その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって―	ボイカ・エリト・ツィゴバ	ブルガリア	白幡 洋三郎		
164	2003	現代住宅に見られる日本人と「モノ」の関わり方	インゲ・マリア・ダニエルズ	英国	千田 稔		
165	2003	阿部知二が描いた〝北京〟	王 成	中国	稲賀 繁美	○	
166	2003	明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響―家族改革をめぐって―	陳 暉	中国	笠谷 和比古	○	
167	2003	人と神とが出会う場所　沖縄県宮古諸島の聖地・拝所―その構造と形態を中心として―	エフゲーニー・S・バクシェエフ	ロシア	小松 和彦		

主な出来事※1

年度	主な出来事
1987	・カルガリーオリンピック開催（88年2月カナダ、冬期） ・大学共同利用機関として京都市に創設　梅原猛創設準備室長が初代所長に就任
1988	・イラン・イラク戦争終結（80～88年） ・ソウルオリンピック開催（韓国、夏期） ・昭和天皇崩御、「平成」に改元（89年1月）
1989	・中国、天安門事件 ・東ドイツ、ベルリンの壁崩壊 ・米ソ首脳マルタ会談、冷戦終結
1990	・韓国、ソ連との国交樹立 ・ドイツ再統一、西ドイツが東ドイツを吸収合併 ・湾岸戦争（91年1～4月） ・御陵大枝山町の現在地に移転 ・開所式を挙行
1991	・ソ連崩壊 ・アルベールヴィルオリンピック開催（92年2月フランス、冬期）
1992	・セルビア万博（スペイン） ・バルセロナオリンピック開催（スペイン、夏期） ・中国、韓国との国交樹立 ・本センターに総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻設置
1993	・EU（欧州連合）発足 ・リレハンメルオリンピック開催（94年2月ノルウェー、冬期）
1994	・阪神・淡路大震災（95年1月） ・天皇皇后両陛下ご視察
1995	・河合隼雄名誉教授が第2代所長に就任
1996	・アトランタオリンピック開催（米国、夏期）
1997	・英国、香港を中国へ返還 ・長野オリンピック開催（98年2月日本、冬期） ・創立10周年記念式典を挙行
1998	・海外研究交流室を設置
1999	・ポルトガル、マカオを中国へ返還 ・文化資料研究企画室を設置（～2017（平成29）年3月31日）
2000	・シドニーオリンピック開催（オーストラリア、夏期）
2001	・米国同時多発テロ（9・11）発生 ・欧州単一通貨「ユーロ」12カ国で流通開始（02年1月） ・ソルトレイクシティオリンピック開催（02年2月米国、冬期） ・山折哲雄名誉教授が第3代所長に就任
2002	・イラク戦争（03年3月～11年）
2003	

※　テーマ以外の国・地域名は、外務省のWebページを参照した。
※1　日本に関係する世界の大きな動向を掴み、時代のメルクマールとするため、『日本史年表・地図』『世界史年表・地図』（吉川弘文館、2019）を参考に作成した。日文研の主な出来事を緑字で示した。

フォーラムのはじまり

NICHIBUNKEN

1987（昭和62）年10月12日
フォーラムの第１回

国際交流基金京都支部でひらかれた記念すべき第１回の研究報告に集まった人々。今とはちがい、所長と研究調整主幹がならんで姿を見せている。

『日文研が若かったころ』創立30周年記念写真集から（2017年５月17日、日文研発行）

フォーラムがはじまった頃

外国から来た研究者の成果報告を、日文研以外の専門家にも開いてもらいたい。だが、設立当初の日文研は、交通事情が悪かった。そこで、市中の便利な場所へでかけ、発表会をもったのが、フォーラムのはじまりである。それは、いわゆる研究協力事業の根幹をなす催しだと、もくされていた。毎回、所長や研究調整主幹が参加をしたのも、そのためである。もう、当時の様子を知る人もへっているので、あえてそのことを強調する。

井上　章一

発表者のテーマ

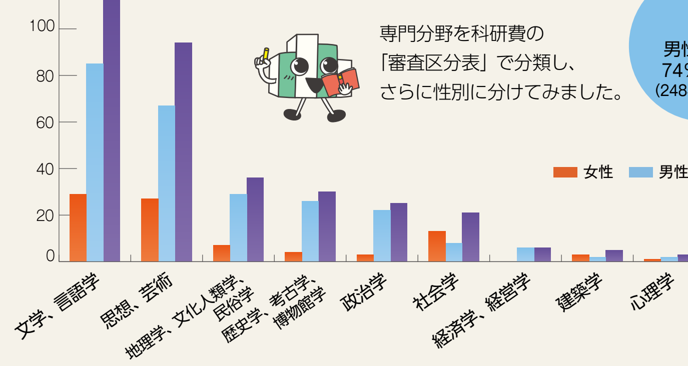
NICHIBUNKEN

フォーラムは創設以来32年間で327回開催され、総発表者数は336名となります（①）。専門分野は「文学、言語学」「思想、芸術」の２種で優に半数を超えており、女性の割合が３割にとどいていません（②）。

①開催回数と発表者数及び性別

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	合計
年度	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
回数	3	6	11	10	10	11	11	10	11	11	11	11	11	10	11	11	8	11	11	11	11	11	10	11	11	11	11	11	11	10	11	8	327
女性	0	1	1	2	1	1	5	1	5	1	2	5	4	1	5	4	3	1	0	3	5	3	5	2	2	1	4	9	2	4	3	2	88
男性	3	5	10	8	9	10	6	9	6	10	13	6	7	9	6	7	5	10	11	8	6	8	5	9	9	10	9	5	9	6	8	6	248
合計	3	6	11	10	10	11	11	10	11	11	15	11	11	10	11	11	8	11	11	11	11	11	10	11	11	11	13	14	11	10	11	8	336

②発表テーマの専門分野



発表者の国・地域

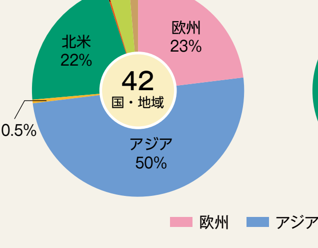
NICHIBUNKEN

発表者の所属機関を地域で分類し（①）、グラフ化し（②）、法人化前後で表してみました（③、④）。②のグラフから半数をアジアが、その他を欧州と北米でほぼ二分しており、それを法人化前後で対比してみれば、「アジア増・北米減」という傾向が浮かび上がってきます。また、法人化後に新たに増えた国・地域名を数えると「15」あり、日文研の国際化が進められた結果と言えます。

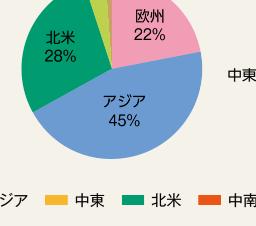
①地域別発表者数

国・地域	人数
アジア	168
欧州	78
北米	72
大洋州	11
アフリカ	4
中東	2
中南米	1
合計	336

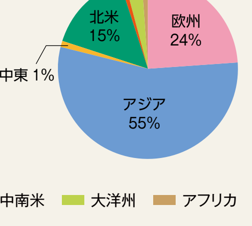
②1987～2018年度



③法人化前（1987～2003年度）



④法人化後（2004～2018年度）



欧州　アジア　中東　北米　中南米　大洋州　アフリカ

特集号 日文研フォーラム

Nichibunken Forum

Kyoto, Japan

国際日本文化研究センター（日文研）に滞在中の外国人研究者による日本研究の成果を市民の皆さまにご紹介し、交流の一助となることを主な目的とする催しです。1987年の設立以来、京都市中心部の会場で継続的に開催しています。

法人化後 2004（平成16）～ 2018（平成30）年度

年度	No.	発表テーマ	発表者	所属機関の国・地域	コメンテーター	報告書	夜間
2004	168	風流の東アジア—美を生きる技法—	閔 周植	韓国	稲賀 繁美		
2004	169	参勤交代と日本の文化	コンスタンティン・ノミコス・ヴァポリス	米国	白幡 洋三郎	○	
2004	170	近代における日本、中国の文人・作家の自殺	王 述坤	中国	鈴木 貞美	○	
2004	171	知られざる歌麿—「百千鳥狂歌合はせ」の詩的、文法的分析—	ヴィクター・ヴィクトロヴィッチ・リビン	ロシア	早川 聞多	○	
2004	172	セールスマンの死—サービス残業・湾岸戦争・過労死—	スコット・ノース	日本	園田 英弘		
2004	173	シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉	色 音	中国	小松 和彦		
2004	174	明治期の外国人留学生と文明開化	李 漢燮	韓国	劉 建輝		
2004	175	近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割	アレクサンダー・マーシャル・ヴィーシー	米国	笠谷 和比古		
2004	176	国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点—	ロイ・アンソニー・スターズ	ニュージーランド	鈴木 貞美		
2004	177	僕はこの暗号を不気味に思ひ…芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気	マッツ・カールソン	スウェーデン	鈴木 貞美	○	
2004	178	アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—	呉 咏梅	中国	山田 奨治	○	
2005	179	中世能楽論における「道」の概念—能役者が歩むべき「道」—	ノエル・ジョン・ピニングトン	米国	光田 和伸	○	
2005	180	韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—	池 明観	韓国	千田 稔		
2005	181	徳川時代の孔子祭	イアン・ジェームズ・マクマレン	英国	笠谷 和比古		
2005	182	韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み	鄭 在貞	韓国	松田 利彦	○	
2005	183	日本の住まいにおける風土性と持続性	オギュスタン・ベルク	フランス	鈴木 貞美		
2005	184	韓国から見た日本のお盆	魯 成煥	韓国	小松 和彦		
2005	185	考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に—	セルゲイ・ラプチェフ	ロシア	宇野 隆夫		
2005	186	〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか—	尹 相仁	韓国	稲賀 繁美		
2005	187	女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—	アンドリュー・ガーストル	英国	早川 聞多		
2005	188	郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—	ウィリアム・パック・ブレッカー	米国	井上 章一		
2005	189	「国語」という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐって—	アーデル・アミン・サーレ	エジプト	鈴木 貞美		
2006	190	玄界灘を渡った鬼のイメージ—なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか—	金 容儀	韓国	小松 和彦	○	
2006	191	京都と文化表象—18世紀朝鮮通信使の目から—	崔 博光	韓国	笠谷 和比古		
2006	192	「満州国」時代における「新京」の日本人作家	劉 春英	中国	劉 建輝		
2006	193	近代化による農村の変貌とその捉え方について—中日農村を比較して—	周 維宏	中国	白幡 洋三郎	○	
2006	194	オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって	ダリア・シュバンバリーテ	リトアニア	小松 和彦	○	
2006	195	ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」—高等教育の社会科カリキュラムを中心に—	エドウイーナ・パーマー	ニュージーランド	千田 稔	○	
2006	196	お札（ふだ）が語る日本人の神仏信仰	ヨセフ・キブルツ	フランス	小松 和彦	○	
2006	197	異国船物語—江戸後期に描かれた船—	ロバート・エスキルドセン	米国	ジェームズ・バクスター		
2006	198	日印関係とインドにおける日本研究—宮沢賢治の菜食主義の思想—	プラット・アブラハム・ジョージ	インド	小松 和彦	○	
2006	199	日本仏教論—その思想史的展開をめぐって—	スティリアノス・パパレクサンドロプロス 笠谷和比古（代講）	ギリシャ	笠谷 和比古		
2006	200	楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—	陸 留弟	中国	鈴木 貞美	○	
2007	201	国境を越えた日本の学校文化	モハメッド・レザ・サルカール・アラニ	イラン	渡邉 雅子	○	
2007	202	唐代文学における日本のイメージ	張 哲俊	中国	劉 建輝	○	
2007	203	「気」の思想・「こころ」の文化—言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方—	チャワーリン・サウェッタナン	タイ	山田 奨治	○	
2007	204	淡路島における災害と記憶の文化—荒神信仰を中心に—	シンシア・ネリ・ザヤス	フィリピン	テモテ・カーン	○	
2007	205	宮本常一の民俗誌を通して見た日本女性と日本文化理解	チャン・ティ・チュン・トアン	ベトナム	テモテ・カーン		
2007	206	朝鮮旅行案内書に見る日本人のロマン	ペイ・ヒョンイル	米国	山田 奨治		
2007	207	遊興の「花」としての理想—妓生と遊女—	金 榮哲	韓国	白幡 洋三郎		
2007	208	中国出土の文物からみた中日古代文化交流史—和同開珎と井真成墓誌を中心として—	王 維坤	中国	宇野 隆夫	○	
2007	209	懺悔・供養・修法—前近代日本仏教の心を探る—	ブライアン・小野坂・ルパート	米国	パトリシア・フィスター		
2007	210	関西のジャズ喫茶文化	マイク・モラスキー	米国	細川 周平		
2007	211	北極から日本へ—スウェーデン探検隊が見た明治日本—	カリン・グニラ・リンドバーグ=ワダ	スウェーデン	鈴木 貞美		
2008	212	渋沢栄一と張謇—日中近代企業家に関する一つの比較—	周 見	中国	猪木 武徳	○	
2008	213	小説を通してみたグローバル時代の在日コリアン	金 貞恵	韓国	松田 利彦		
2008	214	ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ—エミール・ギメと日本の僧侶、神主との問答—	フレデリック・ジラール	フランス	稲賀 繁美	○	
2008	215	萬葉集と風土記に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布	アレキサンダー・ヴォヴィン	米国	光田 和伸	○	
2008	216	韓国における日本研究が語るもの	金 弼東	韓国	小松 和彦	○	
2008	217	1930年代の「改造」における魯迅の日本越境	王 中忱	中国	劉 建輝		
2008	218	日本における禅浄双修—黄檗宗を中心として—	ジェームズ・バスキンド	日本	磯前 順一	○	
2008	219	洋楽ジャンルの適応と変遷—童謡、ヒップホップとレゲエの事例研究—	ノリコ・マナベ	米国	細川 周平		
2008	220	志賀直哉の関西観	郭 南燕	日本	光田 和伸		
2008	221	内藤湖南の中国学界に与えた影響	胡 宝華	中国	井波 律子		
2008	222	江戸時代における無名の人々の伝記	ヴォルフガング・シャモニ	ドイツ	鈴木 貞美		
2009	223	メディア・ミックスの系譜—近代文学とベストセラーと視覚文化—	河名 サリ	米国	山田 奨治		
2009	224	変わりゆく国家と民族のすがた	趙 政男	韓国	松田 利彦		
2009	225	天皇のギフト—明治外交の一齣—	ジョン・ブリーン	日本	瀧井 一博		
2009	226	日本の技術者とフランスの技術者—技術革新の担い手—	野原 博淳	フランス	猪木 武徳	○	
2009	227	韓国の純情漫画と日本の少女マンガ	クッキ・チュー	日本	山田 奨治		
2009	228	世俗化から見た近代仏教—日本とベトナムとの比較—	ファム・ティ・トゥ・ザン	ベトナム	末木 文美士	○	
2009	229	近世日本における開帳と秘仏の文化	許 南麟	カナダ	小松 和彦		
2009	230	猿と一緒に踊り、鷹と共に空へ飛ぶ—バーチャル空間における文化遺産の再構築—	陳 玲	中国	山田 奨治		
2009	231	日本文化の形成及びその特徴	蒋 立峰	中国	笠谷 和比古		
2009	232	東アジアにおける雅楽の流れ	趙 維平	中国	細川 周平	○	
2010	233	見る風景・想像する風景—芭蕉の俳文をたのしむ—	エッケハルト・マイ	ドイツ	白幡 洋三郎		
2010	234	蒋介石の人格形成と日本	黄 自進	台湾	劉 建輝		
2010	235	「訳する」というのはどういうことか?—翻訳を歴史的現象として考える—	ジェフリー・アングルス	米国	鈴木 貞美	○	
2010	236	初期の和歌と地名—英詩からの見方—	フィリップ・ハリス	英国	荒木 浩		
2010	237	戦争・記憶・想像力—文禄の役（壬辰倭乱）をめぐって—	崔 官	韓国	笠谷 和比古		
2010	238	海を渡った日本の教育—戦前期ブラジルにおける日本的教育文化の越境と再創—	根川 幸男	ブラジル	井上 章一	○	
2010	239	日本現代批評と韓国の美	呉 京煥	韓国	劉 建輝		
2010	240	小田実の思想と文学—全体小説を短編で書くこと—	ローマン・ローゼンバウム	オーストラリア	鈴木 貞美	○	
2010	241	亡命ロシア人が見た近代日本	アイーダ・スレイメノヴァ	ロシア	劉 建輝	○	
2010	242	時空を超える弥次喜多の笑い—小説から浮世絵まで—	康 志賢	韓国	早川 聞多		
2010	243	萩原朔太郎と近代日本—時代のパイオニア—	徐 載坤	韓国	牛村 圭		
2011	244	戦後映画における孤児の表象	ミツヨ・ワダ=マルシアーノ	カナダ	細川 周平		
2011	245	関東都督府の満州調査	王 鉄軍	中国	松田 利彦		
2011	246	朱舜水と日本	韓 東育	中国	劉 建輝		
2011	247	竹島から「韓流」まで—日本と韓国の「地政心理」の出会い—	ロー・ダニエル	日本	戸部 良一		
2011	248	ベトナムにおける日本語教育と日本研究の現状	グエン・ティ・タン・タム	ベトナム	白幡 洋三郎		
2011	249	美術とコロニアリズムの掛け合い—国策としての偽満州国第一回美術展覧会について—	王 确	中国	劉 建輝		
2011	250	近代日本の最盛期—明宮嘉仁（のち大正天皇）の生涯を通して—	フレデリック・リチャード・ディキンソン	米国	戸部 良一		
2011	251	韓国における「親日派」言説に関する一つの考察	金 哲	韓国	鈴木 貞美		
2011	252	ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る	グエン・ティ・オワイン	ベトナム	小松 和彦	○	
2011	253	天寿の域にいたる道—貝原益軒の『養生訓』を中心に—	劉 克申	中国	稲賀 繁美	○	
2011	254	帝誅（ころ）しと帝諌（いさ）めの物語—狩野重信筆「帝鑑図・咸陽宮図屏風」を読む—	楊 暁捷	カナダ	荒木 浩	○	
2012	255	東アジア近代史における「記憶と記念」	都 珍淳	韓国	馬 暁華、松田利彦	○	
2012	256	近代日中知識人の自他認識—思想交流史からのアプローチ—	徐 興慶	台湾	劉 建輝	○	
2012	257	日本映画に於ける原型的な表現方法	アンドリヤナ・ツヴェトコビッチ	マケドニア	細川 周平	○	
2012	258	「中国式」日本研究の実像と虚像	劉 岳兵	中国	笠谷 和比古		
2012	259	中国文化への誘い—漢字からのアプローチ—	金 哲会	中国	荒木 浩	○	
2012	260	戦国の宗教文化と宣教師—大航海時代における異教の位置づけを考える—	シルビオ・ヴィータ	日本	末木 文美士		
2012	261	「汎ヨーロッパ」から「美の国」へ—クーデンホーフ=カレルギーと日本—	バルト・ガーンズ	フィンランド	佐野 真由子		
2012	262	日本の中世文化を考える—上流階層における唐物趣味や禅趣味を中心に—	韋 立新	中国	鈴木 貞美		
2012	263	スリランカにおける演劇史と日本の伝統演劇の影響について	クラティラカ・クマーラシンハ	スリランカ	荒木 浩	○	
2012	264	中日文化異同論の推移—近代以降の日本と欧米の学界を中心に—	張 翔	中国	伊東 貴之	○	
2012	265	日本演劇における「非人間的なるもの」との遭遇—霊・動物・テクノロジー—	マーク・コウディ・ポールトン	カナダ	郭 南燕		
2013	266	武術伝授に見る東西両世界	カセム・ズガリ	フランス	笠谷 和比古		
2013	267	中世日本に於ける密教僧と神祇崇拝—伊勢、三輪山等を中心とする両部神道説について—	アンナ・アンドレーワ	ドイツ	末木 文美士		
2013	268	耳塚の「霊魂」をどう考えるか	魯 成煥	韓国	松田 利彦	○	
2013	269	ヨーロッパ貴族と日本美—知られざる17世紀のジャポニスム—	ウィーベ・カウテルト	韓国	白幡 洋三郎		
2013	270	春画を語る・語る春画—春画を西洋の大学で教える諸問題—	ハンス・トムセン	スイス	鈴木 堅弘		
2013	271	ブラジルの日本語文学	エドワード・トーマス・マック	米国	細川 周平		
2013	272	伝統と観光を考える—日本の来訪神行事を事例として—	マイケル・ディラン・フォスター	米国	山田 奨治		
2013	273	近代能楽史と植民地	徐 禎完	韓国	松田 利彦		
2013	274	他者の風景—19世紀西洋絵入り新聞から見る東アジア—	陳 其松	日本	劉 建輝		
2013	275	『吾妻鏡（ウチジン）』の謎—清朝へ渡った明治の性科学—	唐 権	中国	井上 章一	○	
2013	276	めぐりめぐる日本文化			山田 奨治	○	☾
		〝Kawaii〟をめぐる表象—その形成と展開—	高馬 京子	リトアニア			
		ポピュラー・カルチャーと世代間ギャップ—ヨーロッパにおける日本研究の将来は如何に—	ハラルド・フース	ドイツ			
		日本ファッションは「前衛」か?—「FUTURE BEAUTY」展の現場から—	深井 晃子	日本			
2014	277	森有礼が見た19世紀半ばのロシア帝国—虚像と実像—	マリーナ・コヴァルチュク	ロシア	佐野 真由子		
2014	278	中日の知をつないだ上海内山書店	秦 剛	中国	劉 建輝		
2014	279	宗教と世俗の間—祇園祭とサルデーニャの祭をめぐって—	エリザベッタ・ポルク	ドイツ	小杉源一郎、細川周平		☾
2014	280	昭和前期の政治と宗教					
		仏教社会主義について—妹尾義郎と新興仏教青年同盟—	ジェームス・マーク・シールズ	米国	末木 文美士		
		ナチスと日本宗教	ブライアン・アンドレー・ヴィクトリア	英国	山田 奨治		
2014	281	後藤新平研究—中国の視点から—	王 鍵	中国	劉 建輝		
2014	282	日本が自ら日本を世界に紹介した最初の本にみる日本の美意識について	エミリア・シャロンドン	フランス	稲賀 繁美		
2014	283	日本古典文学における隠喩の考察—主に歌ことば、翻訳、隠喩の展開について—	スティーナ・イェルブリン	スウェーデン	荒木 浩		
2014	284	大英博物館「春画展」報告			早川 聞多	○	☾
		タブーを破る—春画研究・展示の意義—	アンドリュー・ガーストル	英国			
		日本の春画をイギリスはどう見たか	矢野 明子	英国			
		大英博物館春画展を受けて—日本側のリアクション—	石上 阿希	日本			
2014	285	グローバル時代における日本大衆文化とその変容—大河ドラマ分析を通じて—	朴 順愛	韓国	谷川建司、山田奨治		
2014	286	仏教と平和主義—日本仏教の挑戦—	ランジャナ・ムコパディヤーヤ	インド	末木 文美士		
2014	287	私の日本映画研究とソフトパワー外交	アンドリヤナ・ツヴェトコビッチ	マケドニア	髙橋剣、田中栄治、亀田真澄		
2015	288	日本をめぐる認識変容—高度成長期から「失われた20年」を通じて—	アンドルー・ゴードン	米国	瀧井 一博		☾
2015	289	蔣介石の日本像	黄 自進	台湾	劉 建輝		
2015	290	火の女神と神になった男—16世紀の井戸茶碗を中心に—	朴 正一	韓国	谷 晃、森 洋久	○	
2015	291	おんなもの—日本の伝統芸能における「女性」の登場とその表象をめぐって—	ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ・ガブロフスカ	ブルガリア	佐伯順子、森山直人		☾
2015	292	何でそんなに愛され、そんなに憎まれるのか—文学キャラクターとしてのスサノオノミコト—	リチャード・トランス	米国	ジョン・ブリーン		
2015	293	法と教養と文化の基礎—田中耕太郎にならって—	ケビン・ドーク	米国	瀧井 一博		
2015	294	鉄道から見た東アジアの歴史	李 容相	韓国	松田 利彦		
2015	295	日中両国はどう付き合うべきか—王正廷の「王道・覇道」論から考える—	高 文勝	中国	山田 辰雄		
2015	296	日本美術に見るユーモア—河鍋暁斎の動物戯画と暁斎が笑った明治の西洋化—	アグネセ・ハイジマ	ラトビア	荒木 浩		
2015	297	ロシア文学における日露戦争の記憶—「日本」の表象を中心に—	ボトーエフ・イーゴリ	ロシア	牛村 圭		
2015	298	「近代の宿命」と「保守」—福田恆存の保守主義を考える—	張 寅性	韓国	米原 謙、瀧井一博		
2016	299	人形浄瑠璃文楽—伝統演劇の魅力と苦難—	ボナヴェントゥーラ・ルペルティ	イタリア	後藤静夫、細川周平		
2016	300	獅子舞がつなぐ東アジア	李 応寿	韓国	稲賀繁美、劉 建輝		☾
2016	301	「古くて新しいもの」—ベトナム人の俳句観から日本文化の浸透を探る—	グエン・ヴー・クイン・ニュー	ベトナム	水城幾雄、倉本一宏	○	
2016	302	中国近代心理学の先駆け、陳大斉の日本留学とそれから—小秀才から教育者へ—	龔 穎	中国	伊東 貴之		
2016	303	変容するヤマト—『古事記』の「天皇」を考える—	アンダソヴァ・マラル	カザフスタン	金沢 英之		
2016	304	木下恵介映画の見どころ—忘れられた日本のこころ—	マッツ・カールソン	オーストラリア	細川 周平		
2016	305	セルビア・アヴァンギャルド詩と「日本の古歌」	山崎 佳代子	セルビア	沼野充義、細川周平	○	
2016	306	北朝鮮の核問題と中国の新たな朝鮮半島政策	姜 龍範	中国	松田 利彦		
2016	307	近世前期の学識と実学を再考する—京都の博学者、馬場信武を中心に—	マティアス・ハイエク	フランス	嘉数 次人		
2016	308	京都から考える「東アジア安全共同体」—「戦争」「災害」「歴史」をキーワードとして—	宋 浣範	韓国	金野 純		
2017	309	着衣改造の近代—わが母の服装観から見る日中衣装変遷史—	官 文娜	中国	井上 章一		
2017	310	三つの「赤い」と二つの「寒い」から、方言を考える—方言と言語類型論の出会い—	鄭 相哲	韓国	千田 俊太郎		
2017	311	筆談で見る明治前期の中日文化交流	劉 雨珍	中国	劉 建輝		☾
2017	312	明治の建築家 伊東忠太—オスマン帝国土産話—	ジラルデッリ・青木美由紀	トルコ	井上 章一		
2017	313	千二百年前の文化交流—入唐日本人の生活と交友—	葛 継勇	中国	田中史生、山内晋次、榎本 渉		
2017	314	日本とベトナムのコミュニケーション文化—「出会い」と「別れ」の挨拶、「ほめ」と「断り」の発話行為を中心に—	ゴ・フォン・ラン	ベトナム	伊藤 哲司		
2017	315	桂離宮の地霊（ゲニウス・ロキ）—近世の庭園における古代の神話と文化—	ニコラ・フィエヴェ	フランス	稲賀 繁美		
2017	316	「Japan Teaブランド」の構築—太平洋を渡った緑茶—	ロバート・ヘリヤー	米国	熊倉 功夫		☾
2017	317	観音さまを抱きしめる—西国三十三所巡礼の旅—	金 容儀	韓国	荒木 浩		
2017	318	悠久なる郷（ふるさと）の響き—黄檗声明の中国的要素—	周 耘	中国	細川 周平		
2017	319	明治の人—を科学に導いた福澤諭吉の絵入り教科書—『訓蒙窮理図解』をひもとく—	ハサン・カマル・ハルブ	エジプト	瀧井一博、石上阿希		
2018	320	重々たる法界 目前に彰（あき）らかなり—禅院の塔頭（たっちゅう）における「境致」の選定—	蔡 敦達	中国	井上 章一		
2018	321	日本国民の戦争記憶をめぐる映画戦争	ディック・ステゲウェルンス	ノルウェー	細川 周平		
2018	322	嘉納治五郎と近代中国—時代を超えた知性と智慧—	潘 世聖	中国	伊東 貴之		☾
2018	323	日本と韓国における「災難文学」の比較とその文化的背景	鄭 炳浩	韓国	坪井 秀人		
2018	324	高齢化するアジア社会における家族の変容—日本の過疎地の高齢者福祉に関する調査研究—	楊 春華	中国	落合 恵美子		☾
2018	325	猫鬼の話—お伽草子『酒呑童子』と近世のパロディー絵巻—	ケラー・キンブロー	米国	伊藤 慎吾		
2018	326	古代日本の国際交流における動物の贈答—ラクダ・羊を中心に—	王 海燕	中国	伊東 貴之		
2018	327	近代中国革命の思想的起源—日本からの建国思想の受容を中心に—	楊 際開	中国	瀧井 一博		

主な出来事※1

2004
- EU、25ヵ国体制成立
- アテネオリンピック開催（ギリシア、夏期）
- 愛知万博開催（05年3月）
- 法人化に伴い、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国際日本文化研究センターとなる

2005
- 京都議定書発効、CO_2削減等を定める
- トリノオリンピック開催（06年2月イタリア、冬期）
- 片倉もとこ国立民族学博物館名誉教授が第4代所長に就任

2007
- 創立20周年記念式典を挙行

2008
- 北京オリンピック開催（中国、夏期）
- リーマン・ショック、米国から世界規模の金融危機へ
- 猪木武徳教授が第5代所長に就任

2009
- バンクーバーオリンピック開催（10年2月カナダ、冬期）

2010
- 上海万博開催（中国）
- 東日本大震災、福島第一原発事故（11年3月）
- 副所長（1名）新設

2011
- 「国際日本文化研究センター25年史—資料編—」発行（12年3月）

2012
- ロンドンオリンピック開催（英国、夏期）
- 尖閣諸島国有化
- 中国、PM2.5による大気汚染が深刻化（13年1月）
- 小松和彦教授が第6代所長に就任
- 「創立25周年を祝う会」を開催
- 「新・日本学誕生 国際日本文化研究センターの25年」発行

2013
- ソチオリンピック開催（14年2月ロシア、冬期）

2014
- 西アフリカでエボラ出血熱流行

2016
- 天皇明仁、生前退位の意向を表明（19年4月30日退位、皇太子徳仁新王が天皇に即位した5月1日より令和と改元）
- リオデジャネイロオリンピック開催（ブラジル、夏期）
- インスティテューショナル・リサーチ室を設置
- 副所長1名体制から2名体制に改組

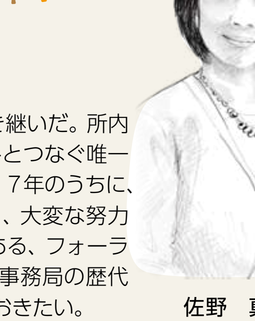
2017
- 平昌オリンピック開催（18年2月韓国、冬期）
- 総合情報発信室を設置
- 創立30周年記念式典を挙行

司会者の想い

NICHIBUNKEN

フォーラムは「三方よし」でこそ

2011年、閑古鳥の鳴いていたフォーラムを引き継いだ。所内の関心は薄かったが、日文研を京都の文化的営みとつなぐ唯一の窓として、手放してはいけないものだと考えた。7年のうちに、聴講のお客様と、主催する日文研、そして何より、大変な努力を経て講演に臨む外国人研究員にとって甲斐のある、フォーラム的「三方よし」に近づくことができた背景に、事務局の歴代担当スタッフの理解と協力があったことを記しておきたい。



佐野　真由子

(2018年度より京都大学)

これからの日文研フォーラム

佐野真由子先生のご尽力によってフォーラムの来場者数が増加したと聞いております。ただ、依然としてフォーラムの課題として指摘されるのは、平日の14時開始が基本なので客層が60・70代に偏ることです。年2回夜間開催を行っていますが、これは逆に時間帯が遅すぎます。現在の会場であるハートピア京都のアクセスの良さは捨てがたいですが、別の会場の利用も検討していきたいと思っています。

呉座　勇一

発表者のひと言

NICHIBUNKEN

多彩な聴衆の前で発表できたことは、私にとってたいへんよかったと思います。学会や研究会とは違ったさまざまなコメントや質問をいただくことができ、いろいろと考えさせられたからです。（リー・A・トンプソン）

様々な立場からユニークなご意見とご明察を示されたことは、私の学問の視野を拡げる上でも、その他の面でも、本当に勉強させていただきました。（劉　敬文）

雨の中を大勢の聴衆の方々に来て頂いて、いろいろと質問を頂戴しまして、問題をさらに深めるヒントを与えて戴きましたことに感謝したいと思います。（王　成）

学問の、時に堅苦しい世界から少し切り離れて、一般市民と話し、皆さんから評価されるチャンスはとても貴重だった。（マーク・メリ）

発表後の質疑応答時には学者の方々だけでなく、一般市民の皆様からも非常に興味深い貴重なコメントを多数いただきました。（アレキサンダー・ヴォヴィン）

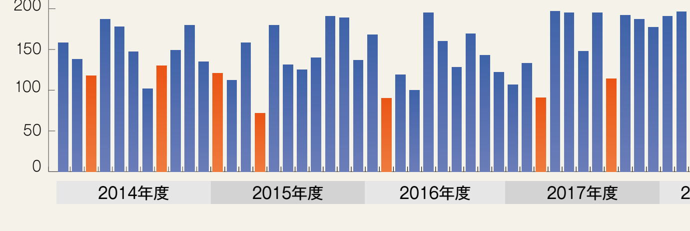
報告書には聴衆との質疑応答によって自己の学問が深まったとする感謝の言葉が多く記されています。聴衆がいてこそのフォーラムであることがここからわかります。

フォーラムのアンケート

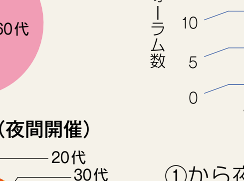
NICHIBUNKEN

分析対象	5年度分	2014年4月～2019年3月
フォーラム数	51回	277～327回
参加者数	7,405名	①は推移。平均145名（1回）
アンケート回収率	40%	②～④はアンケート結果

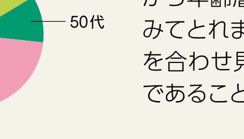
①参加者数の推移



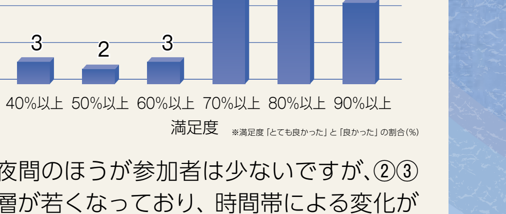
②参加者年齢（昼間開催）



③参加者年齢（夜間開催）



④発表の内容はいかがでしたか？



①から夜間のほうが参加者は少ないですが、②③から年齢層が若くなっており、時間帯による変化がみてとれます。また④と「発表者のひと言」を合わせ見ると、参加者との関係が良好であることがわかります。

IRくん

日文研に関する情報の調査及び分析を実施するインスティテューショナル・リサーチ（IR）室のキャラクター。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター
〒610-1192
京都市西京区御陵大枝山町3丁目2番地
（代）Tel:（075）335-2222
http://www.nichibun.ac.jp
インスティテューショナル・リサーチ室
発行日：2019（令和元）年10月25日